

## 小・中学校教員のダンス授業と苦手意識の考察

和光 理奈<sup>1)</sup>・眞崎 雅子<sup>2)</sup>

### The Relationship Between Embarrassment and Physical Expression Among Elementary and Junior High School Teachers

Rina WAKO, Masako MASAKI

#### Abstract

The purpose of this study was to determine the factors inhibiting elementary and junior high school teachers' ability to teach dance based on questionnaire data obtained through an objective self-evaluation. The results of the study suggest that "embarrassment" is more highly correlated with negative feelings toward dance instruction, than "difficulty" in performing physical expression. To extrapolate, emotional reticence was more closely related to the displeasure felt about teaching dance than difficulty at doing the dance movements. Whereas "difficulty" of body expression was marginally related to "creating movement", "embarrassment" resulted from "expressing myself through the body" and "translating my idea to movement extemporaneously". Further, the data shows that "understanding others by watching their movement itself", and "memorizing dance choreography" are not correlated with embarrassment. Therefore, this study suggests that instructors of dance at educational institutions should be encouraged to overcome "embarrassment" and secondly their "difficulty" in physical expression.

#### 背景と目的

学校体育におけるダンスは、平成元年の改訂（文部省，1989a，1989b）で中学校と高等学校で男女共修となり、平成10年の改訂（文部省，1999a，1999b，1999c）で小学校では「リズムダンス」、中学校・高等学校では「現代的なリズムのダンス」の内容が加わった。さらに、平成24年度には中学校において「武道」および「ダンス」が必修化されるに至った。このようにダンスは変遷しているが、教育現場の実態調査をした寺山（2007）は、千葉県の小学校において表現運動の実施率が4割程度にとどまっていると述べている。また中村（2005）は、男女共修導

入後も東京都の中学校において男子のダンス履修率は1割程度であり、男女ともダンスを全く実施しない学校も2割程度存在すると報告している。平成元年から始まったダンスの男女共修授業は約20年の間停滞しており、表現運動の実施率および内容も完全なものにはなっていないといえる。

しかしその後の調査（中村，2013）では、2012年には東京都内の中学校でダンスの授業が増加し、90%以上の学校で男女共修授業の実施が計画されていることが明らかになった。ただし他県では同様にダンスの授業実施が進んでいることは報告されていない。平成24年度に男女共修が完全実施となった中学校での「ダンス」必修

<sup>1)</sup>中京大学スポーツ科学部

<sup>2)</sup>名古屋女子大学文学部

化は、実施は進んでいるものの、その内実は指導者による敬遠と内容の混乱も招いていることも事実である。

その証拠として、中村（2013）は多くの教員はダンス種目の中でも創作ダンスの教育価値が高いことを認めているが、「生徒が好まない」、「指導が難しい」と敬遠することを報告している。また山口ら（2017）は、体育科教員のダンス指導に対する不安について「生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安（第1因子）」「教員自身の知識に対する不安（第2因子）」「教員自身のダンス技術に対する不安（第3因子）」「生徒のレベルやニーズに対する不安（第4因子）」があると報告している。このように学校現場においてのダンス指導やダンス学習が発展しない原因は、ダンス特有の指導の難しさが指導者自身の不安や苦手意識と繋がっているからではないかと推察できる。

そこで本研究では、小・中学校の教員がダンス授業（ダンスの指導）をすること、およびダンスを学ぶ（する）ことに対する苦手意識と身体表現の自己評価の関連性について、客観的データに基づき検証することを目的とする。

尚、本研究で用いる「ダンス」とは、教育現場で取り扱うダンス学習を意味する。幼児期では「身体表現」、小学校では「表現リズム遊び」「表現運動」、中学・高校では「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」を指し、狭義の身体表現と捉える。また「身体表現」とは、自身の考えや思いが身体の動きを通して、意識・無意識を問わず表されたものであり、そこには他者との関わりが存在すると捉える。本論での「身体表現」は「ダンス学習」を含むものとする。

## 方法

### 1. 調査対象者

愛知県内の小学校・中学校でダンスの指導経験のある、またはこれから経験することが予想される教員136名に対し調査を実施した。得られた回答から、記入漏れなどの欠損値を含むも

のを除き、119名（小学校教員66名、中学校教員53名）を分析対象とした。

### 2. 実施期間と実施場所（表1）

平成29年6月～11月までの5ヶ月の期間に、4つの機関による体育実技（ダンス）研修会において、身体表現に関する調査を依頼した。対象は、小学校・中学校の教員であった。調査は研修会の講師を務めた筆者ら2名で行い、研修会の終了後に実施、その場で質問紙を回収した。

### 3. 質問紙の内容

質問紙は、山崎（2013）および成瀬（2011）の先行研究を基に、筆者らが教員の身体表現・表現運動・ダンスの指導に関する質問項目を作成した。項目内容は、属性、表現運動・ダンス授業の経験年数、ダンス授業に対する苦手意識や指導の困難さなどで構成されている。また、真崎（2017）が作成した、身体表現の自己評価に関する質問項目を用いた。本研究では、身体表現の自己評価に関する質問項目（表2）とダンス指導およびダンス学習に対する苦手意識に関する質問項目（表3）を分析に用いた。

### 4. 調査の手続き

質問紙の配布時に、調査の対象者に対して本研究の趣旨と質問紙への回答は匿名であることを説明した。また質問紙の文面に、本研究への協力は自由意志によるものであり、調査結果の公表については個人が特定されるようなことはないことを明記し、質問紙の提出を持って対象者の同意を得たものとした。

### 5. 分析方法

ダンス指導およびダンス学習に対する苦手意識に関する質問項目と、身体表現の自己評価項目との関連性を明らかにするため、Spearmanの順位相関係数を求めた。分析には、IBM SPSS

表1 実施期間と実施場所

日 時	主 催	場 所
2017年6月15日	愛知県教育委員会	豊橋総合体育館
2017年8月25日	刈谷市教育委員会	ウイングアリーナ刈谷
2017年11月28日	三好市教育研究会 保健体育部会	黒笹小学校体育館
2017年11月29日	愛知県教育委員会	碧南市臨海体育館

表2 身体表現の自己評価に関する質問項目

要素	評価構造	番号	質問項目
身体的共感	見る・関わる	1	人の良い動きが理解できる
		2	個性的な表現に目がいく
		3	しぐさ身振りからその人らしさを感じる
		4	身体表現やダンス観賞が好きだ
		5	人の少しの姿勢の変化などに目がいく
		6	人の動きを真似るのが得意だ
即興表現	関わる・踊る	7	感じたこと考えたことを即興表現できる
		8	人の動きと対極の動きを即興表現できる
		9	人の動きを誇張して即興表現できる
		10	身近なものや動物になりきって動ける
		11	音楽や音に反応して歌ったり踊ったりできる
動きの創出	創る	12	イメージから動きへの置換えができる
		13	テーマやイメージに合った動きが創れる
		14	音楽にあった振付ができる
		15	振りを覚えるのが早い
踊り技術	踊る・解る	16	覚えた振りは間違えずに踊れる
		17	リズムカルに踊れる
		18	体を大きく動かすことができる
		19	自分を思い切り出せる
		20	メリハリよく動ける
		21	さまざまな感じを出して踊れる

選択肢：1. そうでない、2. あまりそうでない、3. どちらとも言えない、4. ややそうだ、5. そうだ

Statistics Version 24 を用い、有意水準5%とした。

## 結果

### 1. 調査対象者の属性

対象者の年齢や経験年数などの属性を表4に示す(表4)。

本研究での対象者は20~30代の教員が107名(89.9%)であった。またダンス指導の経験は未

経験も含め、5年以内が89名(74.8%)であった。

### 2. ダンス指導の得意不得意と身体表現の「難しさ」「恥ずかしさ」との関連

ダンス指導に対する得意不得意と、ダンス学習に対する抵抗感を示す2つの項目「身体表現は難しい」「身体表現は恥ずかしい」に対し、相関分析を行った。

その結果、ダンス指導の苦手意識と「身体表現は難しい」との間にやや弱い相関( $r=.192, p<.05$ )が認められた。また、ダンス指導の苦手意識と「身体表現は恥ずかしい」との間により強い相関( $r=.466, p<.001$ )が認められた(表5)。

### 3. 身体表現に対する「難しさ」「恥ずかしさ」と身体表現の自己評価項目との関連

ダンス学習に対する抵抗感を示す2つの項目「身体表現は難しい」「身体表現は恥ずかしい」と身体表現の21の自己評価項目に対し、相関分析を行った(表6)。その結果、「身体表現は難しい」と、身体表現の自己評価項目「感じたことを即興表現する」( $r=-0.257, p<.05$ )など、数項目との間にやや弱い負の相関が認められた。これに対し「身体表現は恥ずかしい」と身体表現の自己評価項目「自分を出す」( $r=-0.562, p<.001$ )「身体を大きく動かす」( $r=-0.334, p<.001$ )「なりきって動く」( $r=-0.411, p<.001$ )など踊り技術の中でもとくに動きを通して自分自身を見せる、見られることに関する項目や、「イメージから動きへの変換」( $r=$

表3 ダンス指導およびダンス学習に対する苦手意識に関する質問項目

質問項目	選択肢
1 ダンス指導は得意である	1. 得意 2. どちらかと言えば得意 3. どちらかと言えば苦手 4. 苦手 —
2 身体表現は恥ずかしい	1. そうでない 2. あまりそうではない 3. どちらとも言えない 4. ややそうだ 5. そうだ
3 身体表現は難しい	

表4 対象者の属性

	年代				性別		ダンス指導経験年数			
	20代	30代	40代	50代	男性	女性	無し	~2年	3-5年	6年~
小学校教員	34	21	9	2	39	27	16	14	14	22
中学校教員	31	21	1	0	28	25	15	15	15	8

表5 ダンス指導の得意不得意と身体表現の「難しさ」および「恥ずかしさ」との関連

	ダンスの指導の得意不得意				計	Spearman の 順位相関係数
	得意	どちらかと言えば 得意	どちらかと言えば 苦手	苦手		
難しさ	そうでない	1	2	3	1	7
	あまりそうでない	1	9	4	3	17
	どちらとも言えない	0	4	20	3	27
	ややそうだ	0	9	25	9	43
	そうだ	1	4	14	6	25
恥ずかしさ	そうでない	3	7	3	0	13
	あまりそうでない	0	6	12	4	22
	どちらとも言えない	0	8	23	5	36
	ややそうだ	0	6	21	8	35
	そうだ	0	1	7	5	13
計	3	28	66	22	119	

\*p&lt;0.05, \*\*p&lt;0.01, \*\*\*p&lt;0.001

-0.366,  $p < .001$ ) など、動きの創出に関する項目との間により強い負の相関が認められた。また、「他者の動きの理解」「振りを覚える」など、他者の動きを見てその人らしさを感じたり、振付を覚えたり間違えずに踊ったりするなどの項目との間には相関が認められなかった。

## 考 察

調査対象者の属性から、教員としての経験もダンス指導の経験も比較的浅い教員が、ダンス指導技術を身に付けるために講習会へ参加していることが明らかになった。ただし、40代～50代の教員やダンス経験が6年以上という教員も参加していたため、ある程度、ダンス指導経験を重ねた教員でもダンス指導に対する何らかの課題を抱えていることが窺えた。中村(2009)もダンス必修化が定着するためには、定期的・継続的な研修機会の設定が必要と提案しているように、参加者の意識としてもダンスそのものの知識を増やすことや、ダンス指導力の向上を望んでいることが明らかとなった。

小・中学校教員のダンス指導とダンス学習に対する苦手意識の相関分析の結果より、ダンス指導が苦手である原因として、身体表現に対す

る難しさより恥ずかしさの方がより大きく影響していることが分かった。同時に、ダンス指導が得意な人は、身体表現に対する恥ずかしさが少ないことが明らかになった。

さらに、身体表現に対する「難しさ」「恥ずかしさ」と身体表現の21の自己評価項目の相関分析の結果から、「恥ずかしさ」との関連性がより顕著に見られた。このことから教員は、自分を出して踊ることや動きの創出に対して抵抗感を覚える一方、人の身体の動きから個性を理解することや振付を覚えて間違えずに踊ることに対しては抵抗感が少ないことが明らかになった。

大橋(2012)は、現職教員や今後教員を目指す大学院生のレポートから、ダンスの指導者と学習者にとってダンス学習に取り組みにくい状況となっている原因は、自分を表現することや他者から見られることの恥かしさや抵抗感が根本にあり、とくに創作ダンスにおける「題材」や「イメージ」から動きへと翻訳する学習内容に因るものであると考察している。本調査の結果においても、ダンス指導者の得意不得意の原因が身体表現の恥かしさに因るところが大きいことや、「題材」や「イメージ」から動きに置き換える学習内容に対して難しさや恥ずかしさを感じていることなど、大橋の考察を支持する結

表6 「難しさ」および「恥ずかしさ」と身体表現の自己評価項目との相関  
(Spearman の順位相関係数)

	難しさ	恥ずかしさ
1 人の良い動きが理解できる	0.142	-0.147
2 個性的な表現に目がいく	0.126	-0.153
3 しぐさ身振りからその人らしさを感じる	0.163	-0.167
4 身体表現やダンス鑑賞が好きだ	0.010	-0.269 **
5 人の少しの姿勢の変化などに目がいく	0.031	-0.101
6 人の動きを真似るのが得意だ	0.066	-0.182 *
7 感じたこと考えたことを即興表現できる	-0.257 **	-0.419 ***
8 人の動きと対極な動きを即興表現できる	-0.039	-0.092
9 人の動きを誇張し即興表現できる	-0.204 *	-0.274 **
10 身近なものや動物になりきって動ける	-0.094	-0.411 ***
11 音楽や音に反応し歌ったり踊ったりできる	-0.190 *	-0.354 ***
12 イメージから動きへの置換えができる	-0.219 *	-0.366 ***
13 テーマやイメージに合った動きが創れる	-0.186 *	-0.306 ***
14 音楽にあった振付ができる	-0.034	-0.276
15 振りを覚えるのが早い	0.049	-0.002
16 覚えた振りは間違えずに踊れる	0.072 *	0.076
17 リズミカルに踊れる	-0.061	-0.216 *
18 体を大きく動かすことができる	-0.013	-0.334 ***
19 自分を思い切り出せる	-0.199 *	-0.562 ***
20 メリハリよく動ける	-0.086	-0.288 **
21 さまざまな感じを出して踊れる	-0.194 *	-0.382 ***

\*p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001

果が得られた。また宮下（2007、2008）は、保育者を目指す学生を対象とした調査であるが、ダンスの得意・不得意とダンス表現の自己評価の関連性の強さについて報告している。これについては、上述の身体表現の自己評価項目「イメージ」から「動き」への翻訳に対して苦手意識や抵抗感があることのほかに、抵抗感の少ない項目として、振りを覚え間違えずに踊るなどの技術に関することや、他者の動きを見てその人らしさを感じるなどの身体的共感に関する事などが新たに示された。よって本調査では、宮下の報告を支持しつつ、さらに詳細な内容を提示することができた。

### 結論と展望

本研究は、教員のダンス指導およびダンス学習に対する苦手意識と身体表現の自己評価の関連性について、客観的データに基づき検証することを目的とした。その結果、小・中学校教員がダンス指導を苦手とする原因として、身体表

現に対して抱く「難しさ」より「恥ずかしさ」の方が大きく影響していることが明らかになった。

また、身体表現の「難しさ」は、「動きの創出」に関する項目と弱い相関関係にあり、「恥ずかしさ」の根本にあるのは、自己を解放して何かを表現することや、感じたことや考えたことを動きに置き換えたり即興表現したりすることにあった。比して「恥ずかしさ」とは相関のない身体表現の自己評価項目としては、人の動きを見て他者を理解することや振付を覚えて再現することが挙げられた。

今後、教育現場でダンス学習を担当する指導者は、第一に身体表現に対する「恥ずかしさ」次に「難しさ」を取り除く必要があると考えられる。村田（2008）が「表現運動・ダンス」学習が他の運動領域とは異なる学びのスタイルとして「心身の解放」「身体による豊かなコミュニケーション」「今、ここから創り出す問題解決学習」であると述べているように、まずは指導者自身が自己を解放できる単純な動きやすぐ真



似ることの出来る動きを習得することで身体表現に対する抵抗感を取り除き、自信や向上意欲を持つことが重要だろう。そして次の段階として、他者との関わりの中でお互いの動きを模倣したりアレンジしたりするなど、即時反応的な動きの体験を積み上げ、さまざまな動きを習得していくことが望まれる。このような自分自身の身体表現活動とそのフィードバックを踏まえて、ダンスの指導者として適切なダンス教材を開発、実施していくことにより、ダンス指導に対する苦手意識の払拭、さらにはダンス授業の質の改善にも繋がっていくことが期待される。

## 文献

- 安藤幸・岡田晶子(2003) 徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点—1991年と2001年の表現運動の比較を通して—。鳴門教育大学実技教育研究, 13: 53-65.
- 大橋奈希左(2012) ダンスの授業における「かわり」についての考察—受講者のレポートの記述をもとにして—。上越教育大学紀要, 31: 331-337.
- 梅ちか子・小松恵理子(2015) 現職教員のダンス授業実践に影響を及ぼす要因に関する検討—鹿児島県におけるダンス実技研修会のアンケートより—。九州体育・スポーツ学研究, 30(1): 35-41
- 寺山由美(2007) 「表現運動」を指導する際の困難さについて—千葉県小学校教員の調査から—。千葉大学教育学部研究紀要, 55: 179-185.
- 中村恭子(2009) 中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—。順天堂大学スポーツ健康科学研究, 13: 27-39.
- 中村恭子(2013) 日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題。スポーツ社会学研究, 21(1): 37-51.
- 中村恭子・浦井孝夫(2005) 中学校における体育の種目選択制に関する研究。順天堂大学スポーツ健康科学研究, 9: 52-56.
- 成瀬麻美・寺山由美(2011) 高等学校教員のダンスの授業に対する意識について—授業内容に着目して—。舞踊教育学研究, 第13号: 1-11.
- 眞崎雅子・近藤良享(2017) 保育者に必要とされる身体表現力の育成に関する研究—学習者の自己評価から見た身体表現力因子の抽出—。スポーツ教育学研究大会号37: 57.
- 宮下恭子(2007) 表現・ダンスに対する意識と保育者資質—保育専攻学生への調査から—。日本幼児体育学会第3回大会研究発表抄録集, 62-63.
- 宮下恭子(2008) 表現あそびの指導に関する課題—幼児体育の授業を通して—。日本保育学会第61回大会発表論文集, 563.
- 村田芳子(2008) 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?: 学習内容と「習得・活用・探究」の学習をつなぐ。体育科教育, 56(3): 14-18.
- 文部省(1989a) 中学校学習指導要領。大蔵省印刷局: 東京。
- 文部省(1989b) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編。東山書房: 京都。
- 文部省(1999a) 小学校学習指導要領解説 体育編。東山書房: 京都。
- 文部省(1999b) 中学校学習指導要領解説 保健体育編。東山書房: 京都。
- 文部省(1999c) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編。東山書房: 京都。
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領 保健体育編。東山書房: 京都。
- 山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子(2017) 体育科教員のダンス指導不安の探索的研究。日本教育工学会論文誌, 41(2): 125-135.
- 山崎朱音(2013) ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方—静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して—。静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 21: 73-81.